



# 東北復興日記

まだまだ

▶▶ 241



丸森町地域おこし協力隊  
阿部倫子さん

東日本大震災は、豊かな農村の暮らしがどんなに幸せだったか気付かせてくれました。宮城県最南

端の丸森町は原子力災害による農作物などの風評被害も大きく、町を離れた友人も少なくありません。私も出身地・石巻市の現状を見過ぐせず一時町を離れましたが、丸森への思いは変わらず、二〇一六年夏に総務省の地域おこし協

あったりすることで互いのことを知り、補い合う関係もできました。農家から不良繭を譲り受けて分配したり、毛羽（蚕が繭を作る時に足場となる最初に吐く糸）の活用や、織り糸に使えない糸を和紙材へ、和紙の切れ端を織材へと無駄のない循環ネットワークも構築されつつあります。

昨年末にはシルクを生かした暮らしや生業としての魅力発信、経済効果も視野に入れた展示販売会を開催し写真。大沼教授のプロジエクトで改装中の施設が会場になりました。シルク入りの和紙が貼られた壁は光の加減できらめき、

## シルクの魅力を発信

力隊制度を使い、戻ってきました。震災から七年たっても全ては元通りになりませんが、丸森町でシルク文化再興の兆しが見え始めています。町では最盛期に二千戸の養蚕農家が生産量は県内一。商品にならない繭から糸をとり、家族のため衣を織っていたほどシルクは身近な存在でした。しかし、今は五戸の農家で伝統産業を支えています。

そんな中、東北工業大学の大沼正寛教授の産業の再構築などを目指すプロジェクトと出会い、養蚕と繭を核にした多世代共創の取り組みが進められています。養蚕農家や染織作家、和紙作家、繭細工作家が一堂に会し、思いや課題を語り合ったり、アトリエを訪問し



※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

絹製品と引き立て合う空間は来場者に喜ばれ、自信と励みになりました。丸森シルクに魅了された一人として先人から継がれた風土や知恵に根ざした資源に目を向け、世代や技の垣根を越えた、この地らしい在り方を探っていききたいです。